

[研究ノート]

## 納所文子研究事始

近藤 博之

KONDO Hiroyuki

### 1. はじめに

納所文子は、明治時代に活躍した音楽教育家・作曲家である納所弁次郎の長女で、明治時代末期から大正時代前半にかけ、主に父・弁次郎のピアノ伴奏により数々の唱歌をレコードに吹き込んだ人物である。この時期は、日本のレコード界の創成期に当たり、文子はまさに唱歌の分野におけるレコード歌手のパイオニア・第一人者であった。

しかしながら、今までのレコード史または唱歌・童謡史の研究の中で文子のことが体系的に取り上げられたことは皆無であるばかりでなく、断片的に文子のことが記述されている場合であっても、大正時代中期にデビューした本居長世の娘達（以下「本居姉妹」という。）の二番煎じであると、誤った捉えられ方をされてきたケースが多い<sup>(1)</sup>。

本居姉妹については、舞台及びレコードにおいて童謡を歌い普及させた存在としての功績が広く知られており、メディア論及び身体論の観点から学術的に考察した研究が蓄積されている<sup>(2)</sup>のに対し、文子は、日本のレコード史の最も早い時期において、唱歌レコード吹込の第一人者であったにもかかわらず、ほとんどその存在が語られてこなかった。第5セクションで後述するように、本居姉妹とは異なり文子の活動主体は、当時ほとんど普及していなかったレコードのみであると思われ<sup>(3)</sup>、近代日本音楽史に与えた功績は本居姉妹に劣るかもしれない。しかしながら、明治末期から大正初期の、誕生まもない頃のレコード産業における第一人者としての文子の地位は揺るぎないものであるし、大正時代中期の本居姉妹との共通性も見出すことができる。文子の存在に着目することは、近代日本音楽史をメディア論的な視座から考察する上で十分な価値があると考えられる。その第一段階として、今まで断片的にしか語られてこなかった文子の足跡及びその立ち位置を整理することを本稿の目的としている。

### 2. 納所文子のレコードとその特徴

#### 2-1. 出張録音（レコード吹込開始）

文子は、1896年4月23日<sup>(4)</sup>、弁次郎の長女として東京に生まれた（本名はフミ）。後年、文子がラジオ出演した時の読売新聞朝刊（1926年11月11日及び1927年1月28日）には、9歳

の時に日本で初めて蓄音機に唱歌を吹き込んだのが文子であると紹介されており、これを数え年として計算すると、1904年に初めてのレコードを吹き込んだということになる。

一方、日本でのレコード吹込は、1903年2月に英国グラモフォンが出張録音を東京で行ったのが最初である<sup>(5)</sup>。もっとも、この時には唱歌は吹き込まれていない。管見の限り、天賞堂扱いの米国コロムビアレコード（以下「天賞堂コロムビア」という。）日本譜の1905年1月時点までの総目録である、「写声機平円盤曲名一覧」に記載の弁次郎の13面のレコードが、日本での初めての唱歌レコードである〔岡田，1988，295〕<sup>(6)</sup>。文子の名前がレコードに初めて登場するのは、同じく天賞堂コロムビアの1907年7月発行の同名の一枚刷目録に記載の6面である〔岡田，1988，308〕。岡田則夫によると、天賞堂コロムビアの第1回出張録音が1903年春、第2回出張録音が1906年に行われ、それぞれ何回かに分けて日本に輸出された〔岡田，1988，513、516〕。弁次郎の13面のレコードは、1903年春の録音で1904年10月から1905年1月までの間に発売<sup>(7)</sup>、文子のレコードは、1906年に10面が録音され、1907年7月に6面、それ以降に残りの4面が発売されたものと結論づけることができる<sup>(8)</sup>。

日米蓄音器商会在1909年5月に日本で初めての国産レコードを発売するまで、日本でのレコード吹込はすべて海外のレコード会社による出張録音であった。〔岡田，1988〕に記載の目録によると、各社の出張録音により唱歌レコードが計66面発売されている<sup>(9)</sup>うち、納所父娘のレコードは、計23面がすべて天賞堂コロムビアから発売されている。日本でのレコード産業の勃興期から、文子（及び弁次郎）が唱歌レコードの分野で活躍していたことが分かる。

## 2-2. 初期の日蓄（文子の全盛期）

（2-1）で先述したように、日米蓄音器商会在1909年5月に日本で初めての国産レコードを発売した。通史としては、翌1910年8月に日本蓄音器商会在新設され、同時に日米蓄音器商会的商号は廃止、そして同年10月に(株)日本蓄音器商会在が創立されるのであるが、本稿ではこれらをまとめて「日蓄」として扱う。

日蓄が国産レコードを発売するようになった1909年から数年間、同社の唱歌レコードの分野において、文子は他の追随を許さなかった。当時発売された日蓄のレコード文句集<sup>(10)</sup>によると、1909年9月から1913年11月の間に発売された唱歌レコード46面のうち37面が文子のレコードである（なお、残り9面のうち1面は弁次郎の独唱）。その後の1913年12月から1914年11月の間の新譜8面のうちでは4面、1914年12月から1917年6月の間の新譜16面のうちではたった1面しか文子のレコードは発売されていない。したがって、文子のレコードは初期

日蓄の最初の4年間に集中していたことが分かる。文子が精力的にレコードを吹き込んでいたこの時期は、日蓄に次ぐ二番目の国産レコード会社である時枝商店が1911年3月に神戸で誕生したのを皮切りに、1912年7月に京都で東洋蓄音器(株) (ラクダ印)、同年10月に大阪で大阪蓄音器(株) (白熊印)、1913年4月に東京で東京蓄音器(株) (富士山印) がそれぞれ設立されたばかりであり、日蓄が国内のレコードのかなりのシェアを占めていた。まさに、文子は唱歌レコードの第一人者であり、かつパイオニア的存在であった<sup>(11)</sup>。

### 2-3. 東洋蓄

1912年7月に京都で設立された東洋蓄音器(株) (以下「東洋蓄」という。)においても、文子はレコードを吹き込んでいる。東洋蓄は1919年12月に日蓄に併合されるが、それ以前の1916年7月の同社目録<sup>(12)</sup>によると、当時発売されていた40面の唱歌レコードのうち37面が文子のレコードである(なお、残り3面のうち1面は弁次郎の独唱)。

なお、東洋蓄は、自社吹込盤の他に他社の複写盤も発売しており、文子の日蓄盤も複写盤として何点か発売している<sup>(13)</sup>が、上述の1916年7月の同社目録に記載のレコードは、いずれも日蓄等他社の目録には出てこないことから、東洋蓄の自社吹込盤と考えてよいだろう。

### 2-4. 大正末期～昭和初期の日蓄

文子が2回目のラジオ出演をした1927年1月28日付の読売新聞朝刊には、「十何年かは全く楽団から遠退いて居」た文子が「昨年十一月十一日に十何年振りで唱歌を放送した」との記述がある。1910年代の後半以降、文子はレコード吹込から遠ざかっていた<sup>(14)</sup>が、ラジオ出演を行っていた1927年から1928年にかけて、日蓄から6面のレコードを発売している<sup>(15)</sup>。

### 2-5. 文子のレコードの特徴

(2-1) から (2-4) までで見た、各社から各時期に発売された文子のレコードは、総じて次の特徴を有している。

- ①「鉄道唱歌」のように極端に歌詞が長い楽曲を除き、必ず全歌詞を歌い通している<sup>(16)</sup>。
- ②明治時代に発表された各種唱歌をひと通り吹き込んでいる。文子の父弁次郎は、田村虎蔵らと提唱した言文一致唱歌をはじめ、多数の唱歌・軍歌を作曲しているが、弁次郎や虎蔵作曲の楽曲が多いという偏りはない。その範囲としては、明治初期(音楽取調掛編纂の唱

歌集登場以前)の『保育唱歌』、音楽取調掛(官撰)による『小学唱歌集』・『幼稚園唱歌集』、「君が代」や「天長節」などの儀式用唱歌、軍歌(17)、滝廉太郎の『幼稚園唱歌』、納所弁次郎・田村虎蔵らによる『幼年唱歌』・『少年唱歌』、文部省による『中学唱歌』『尋常小学唱歌』などに及ぶ。もっとも、初期の唱歌(『保育唱歌』や『小学唱歌集』・『幼稚園唱歌集』など)の吹込数自体は相対的に少ない。

- ③1面に複数の曲目を吹込む時(両面盤の場合は両面通じて)は、同一唱歌集からの曲目となっている傾向が強い。
- ④伴奏は、ほとんどが弁次郎のピアノ(18)によるもので、至極簡素である。もっとも、大正時代までの日本の洋楽系統のレコードに、簡素なピアノ伴奏のものが多くという特徴は、唱歌に限った話ではない。昭和時代に入ってオーケストラ伴奏のレコードが増えてくるが、大正末期～昭和初期に日蓄から文子が吹き込んだ6面のレコードは、相変わらず簡素なピアノ伴奏であった。

以上をまとめると、文子のレコードには、娯楽性という観点は弱く、教育的な性質が強いという傾向が見えてくる。もっとも、大正時代までの唱歌レコードは、文子のレコードに限らず全般的にこのような傾向があった(19)。文子のレコードは、大正時代までの唱歌レコードの標準規格であったと思われる。

### 3. 納所文子のレコードの位置づけ

1916年に日蓄に入社しレコード製作に携わった森垣二郎は、過去を振り返り執筆した『レコードと五十年』の中で、文子が初期日蓄の売り上げに貢献した1人であったことを再三述べている[森垣, 1960, 19, 32, 68, 107, 133]。また、大正時代前半期に少年時代を過ごした保田太郎と武谷三男は、蓄音機にかじりついて文子のレコードをよく聞いたと述べている[保田, 1970, 20][武谷, 1985, 5](20)。実際のところ、当時文子のレコードはどの程度人々に聞かれていたのだろうか。

#### 3-1. 一般家庭での状況

まず、明治時代末期から大正時代にかけて、レコード及び蓄音機が一般家庭にどの程度普及していたのかを考えたい。普及率を直接示す資料は、残念ながら見つけれられていないが、倉田喜弘は、日蓄のあゆみを振り返った『蓄音器世界』6巻1号(1919年1月号)の記事から、日

蓄レコードの明治期総プレス枚数を 250 万枚、日蓄製蓄音機の明治期総生産台数を 2 万 9 千台と推測している [倉田, 1979, 119-120, 123]。明治末の日本の人口が約 5 千万人であるから、単純計算でレコードは 20 人に 1 枚、蓄音機に到ってはわずかに 1700 人に 1 台分しか出回っていなかったことになる (もっとも海外からの輸入数量を考慮に入れていないが、それも微々たるものであったろう)。

次に、文子のレコードの定価は、出張録音盤が 3 円 50 銭、日蓄盤が 1 円 50 銭 (日蓄の発足当時) であり、蓄音機の定価は、出張録音盤の時代が 33 円～75 円、日蓄の発足初期が 25 円～50 円であった。日蓄による国産レコード及び蓄音機の登場により、各定価が安くなったとは言え、明治末当時の公務員 (高等官) の初任給が 55 円、銀行員の初任給が 40 円であったから、まだまだかなりの値段であった<sup>(21)</sup>。1910 年代の日本でのレコード産業が「かならずしも一般の家庭や個人によって使用されるようなものとは想定されていなかった」 [周東, 2008a, 100] と周東美材が述べているのは、真実を捉えているであろう<sup>(22)</sup>。レコード及び蓄音機は贅沢品であり、このようなものを買えるのは、上流階級の富裕層のみであった。

### 3-2. 家庭外での状況

個人でレコードを購入する層が限定的だったとしても、喫茶店等の公共の場や学校でレコードを聞くという文化はあったのであろうか。

マイク・モラスキーは、「日本の喫茶店で蓄音機を備えて顧客にレコードを専門に聴かせる「音楽喫茶」は大正初めに現れたようだが、本格的に普及し出したのは関東大震災後である」 [モラスキー, 2010, 33] と述べている。これが真実であることは、初田亨が『カフェーと喫茶店』の中で調査した内容からも裏付けられる。蝋管レコードが全盛期の明治 20 年代 (1895-1904) には、街頭の蓄音機屋が客を呼び寄せゴム管によりレコードを聞かせるという商売が繁盛していたが、これも平円盤レコードが普及してからは衰退していったので、明治時代末期から大正時代初期にかけては、レコードが公共の場で聞かれる機会は、都会においてさえ少なかったと言えよう<sup>(23)</sup>。

次に、レコードを学校で用いるという考えは、既に出張録音盤の時代から見受けられる<sup>(24)</sup>。しかしながら、学校でレコードが実際に用いられるようになってきたのは、大正時代の半ば過ぎからであったという<sup>(25)</sup>。したがって、文子らの唱歌レコードがこの時期に学校で消費されることもほとんどなかったであろう。

### 3-3. 1920年代の状況

以上のように、文子のレコードを彼女の全盛期にリアルタイムで聞いていた層はごく限られていたと思われる。しかしながら、一般家庭や学校等でレコード及び蓄音機が普及し始めた1920年代になっても、文子のレコードは生き残っていた。

前述したように、1910年代までの日本ではレコードを聞いていた層はごく限られていたが、周東美材が指摘するとおり、1910年代半ばになると、蓄音機の家内化が模索されるようになり、「1920年代前後の消費社会の出現はレコードの大衆化の推進力とな」った〔周東，2008a，100〕<sup>(26)</sup>。実際、1914年に126,098円だった蓄音機の国内生産金額が、1920年には5,616,301円と急増している<sup>(27)</sup>。

この頃には、子ども向け音楽レコードとしての「童謡」レコードが登場していたし、新譜として発売される唱歌レコードは、各社から様々な歌手によるものが発売されており、そこに文子の名はなかった。1923年4月23日に発表された第1回文部省推薦レコードには、文子のレコードは1枚も入っておらず、彼女のレコードが既に古い存在になっていたことを窺わせる。しかしながら、少なくとも1922年8月の時点で、既発売の42面の文子の日蓄盤のうち31面が廃盤にならず生産、発売され続けている<sup>(28)</sup>。また、日本の音楽鑑賞教育の黎明期における代表的書物として位置づけられる1924年出版の2冊、山本壽『音楽の鑑賞教育』と津田昌業『音楽鑑賞教育』のうち、後者には18面の文子のレコードが鑑賞教材として取り上げられている<sup>(29)</sup>。

文子が活躍していた1910年代前半は、まだまだレコードの影響力は少なく、彼女のレコードを聞いていた人口は少なかったであろう。しかしながら、レコードが普及し始めた1920年代になってもなお、文子のレコードは唱歌レコードの代表的存在として市場に残っており、人々に認知されていたと言えよう<sup>(30)</sup>。

## 4. ラジオ出演

文子が精力的にレコードを吹き込んでいた明治時代末期から大正時代前半当時は、当然のことながらラジオ放送は存在していなかった。日本におけるラジオ放送は、1925年に東京・大阪・名古屋でそれぞれ開始し、翌1926年に東京・大阪・名古屋放送局が統合し社団法人日本放送協会（NHK）が発足している。確認した限り文子は、1926年11月11日から1929年7月28日までの間、計8回ラジオ出演を果たしている。

レコードではそのほとんどが父弁次郎のピアノ伴奏のもと、すべて歌唱者として吹き込んでいた文子であったが、ラジオ出演においては、歌唱者としての出演が6回その他、ピアノ伴奏者

としても7回の出演を行っている<sup>(31)</sup>。文子出演日の新聞ラジオ欄上では、「日本で最初の唱歌の先生」であると報じる共演の父弁次郎とともに、「日本最初の蓄音機に唱歌を吹き込んだ方」(1927年1月28日付読売新聞朝刊)、「童謡でおなじみの納所のおぢいさんとおばさん」(1927年3月8日付読売新聞朝刊)、「蓄音機に澤山吹込んで有名な方」(1927年10月29日付読売新聞朝刊)などと紹介されている。

レコード吹込との比較を行うと、次のとおりである。

(1) 前述のとおり、歌唱者としてだけでなくピアノ伴奏者としても出演している。その内訳は、バリトン歌手でもあった父弁次郎の独唱を伴奏するのが主であったが、弟の重雄とピアノ連弾を行ったり、長女の米子<sup>(32)</sup>が歌う唱歌・童謡の伴奏を行うこともあった。

(2) レコード吹込の曲目は、大正時代前半までに発表された唱歌のみであったが、ラジオではそれらだけでなく、大正時代後半以降に発表された唱歌や童謡までも歌っている。

既に多くの論者が指摘しているように、唱歌が学校での授業用教材として明治時代に生み出されたものであるのに対し、童謡は、既存の唱歌批判の中から大正時代中期に生まれた、子どものための歌もしくは童心を歌った民間運動による家庭向けの歌である。このように、唱歌と童謡は似て非なるものであるが、例えば先に引用した新聞記事の中に、「童謡でおなじみの納所のおぢいさんとおばさん」と表現しているものがあるように、レコード産業が確立したこの昭和初期においては、唱歌と童謡の境界線が曖昧になり、両者が混同されていくようになった。(2-4)で示した、ラジオ出演と同時期に日蓄から吹き込んだレコードがいずれも旧来の唱歌であるのに対し、ラジオ出演においては、文子もこの唱歌と童謡の境界線の曖昧さの影響を受けているという事実は、指摘するに値する<sup>(33)</sup>。

(3) レコード吹込の時同様、歌唱者として出演した7回のうち6回は、弁次郎のピアノ伴奏によったが、残りの1回は、「童謡ジャズ」と題してジャズバンド伴奏により唱歌及び童謡を歌っている。

レコードが電気吹込となり録音技術が格段に向上した昭和初期のこの時期、レコードに吹き込まれる唱歌及び童謡も、従来までの簡素なピアノ伴奏とは一線を画し、オーケストラやジャズバンドといった大型伴奏により軽快に歌われることが多くなったが、文子もラジオ出演においては、その影響を受けたということになる<sup>(33)</sup>。

## 5. 納所文子の立ち位置

文子をその後の童謡歌手達と比較すると、表のようにまとめることができるだろう。

### 本居姉妹及びその後の童謡歌手との共通点、相違点

	文子	本居姉妹	本居姉妹以降の童謡歌手 <sup>(34)</sup>
(1) 主な活躍期間	明治末期 ～大正初期	大正中期～昭和初期	大正後期以降
(2) 主な活動主体	レコード <sup>(3)</sup>	親子公演（舞台）が主 であり、レコードはあ くまでも副次的な扱い	レコード
(3) 演唱形態	少女歌手（？） 独唱	少女歌手独唱	同左であることが多い
(4) 活動背景①	作曲家である 父が後ろ盾と なっていた	同左	同左である場合とそうでない 場合とが混在
(5) 活動背景②	父親が皇室と 関わりあり <sup>(35)</sup>	先祖が皇室と強い関わ りがあり、家系の上で 威信があった	左の2者のような後ろ盾は 持っておらず、単なるレコード 会社の歌手としてデビュー
(6) 歌っている楽 曲	唱歌（学校教育 で扱うもの）	童謡（童謡運動の流れ を汲むもの）	レコード産業としての童謡・ 唱歌
(7) 伴奏 （レコード）	ピアノのみ	ほとんどピアノのみだ が、昭和期のレコード にはオーケストラ伴奏 のものも	初期はピアノのみだが、だんだ んとオーケストラ伴奏（ジャズ アレンジ含む）主流に

(2)は、文子、本居姉妹以降の童謡歌手ともにレコードであるが、レコード及び蓄音機の普及率がまったく異なっているという違いがあることは、当然ながら念頭に入れなければならない。

(3)は、通常、本居姉妹及びそれ以降の童謡歌手のほとんどが少女であることが、大正時代から昭和初期にかけての童心主義の文脈の中で語られている<sup>(36)</sup>。文子も活動当時の年齢だけを

考えると少女歌手であった。また、(4) (5)で言及した内容も重ね合わせると、本居姉妹と同じく令嬢でもあった<sup>(37)</sup>。この「少女歌手」「令嬢」というキーワードは、従来本居姉妹を論じる際に用いられてきたが、果たして文子もこのキーワードを用いて論じることができるのか、また本居姉妹との連続性を見出すことができるのかは、今後論考を進めていきたい<sup>(38)</sup>。

## 6. おわりに

冒頭にも書いたように、納所文子というレコード歌手に関しては、今までその論考はおろか、どのような活動を行ってきたのかさえ、ほとんど整理がなされていない状況であった。そこで、本稿はまずその整理を行うことに精力を注いだ。今後、レコード史及び近代日本音楽史の中の文子の位置づけを論考していければと考えている。

もっとも、そもそもどのような経緯から弁次郎がレコードという新しいメディアに目をつけ、長女である文子に唱歌を吹き込ませるに到ったのかということや、レコードとラジオ以外の活動状況など、文子に関しては不明な点がまだまだ多い。これらは、今後納所文子研究を進めていく中で肝心な情報であるため、引き続き合わせて情報収集を行っていきたい。

---

## 注

- (1) 例として、[長田, 1994, 33]、[小山, 2005, 308]、[細川・片山, 2008, 508]。[日本近代音楽館, 2003, 26] は正確に記述されている。
- (2) [坪井, 2006]、[周東, 2008b] が詳しい。
- (3) 文子の長女である米子は、文子を回想して、「大変な美人で、しばしば雑誌のグラビアなどに載ったといいます」と述べている [鮎川, 1995, 73]。しかしながら、一次資料でそれを確認できなかったため、本稿においては、文子の活動主体をレコードのみとした。
- (4) 1915年3月25日付の東京音楽学校修了証書の記載による。文子の孫に当たるN氏への聞き取りの際、お見せいただいた。文子は、レコード歌手として活躍中の1910年に東京音楽学校選科に入学、唱歌とピアノを履修し1915年3月に修了している。(『東京音楽学校一覧』明治43年-44年版及び大正4年-5年版を参照)
- (5) 本稿でのレコードは、すべて平円盤のことを指している。それ以前、1890年代から円筒形の蝸管レコードが日本でも存在しており、山口亀之助によると、唱歌レコードも各種製作されていたとある [山口, 1936, 84]。しかしながら、当時の蝸管レコードは複製

技術が乏しく、大量生産ができなかったため、レコードが日本で商業的に流通するようになったのは、平円盤が上陸した 1903 年以降であると考えてよい。

(6) 目録に文子の名前の記載がないため、弁次郎単独の器楽レコードだと思われるが、いずれも未視聴のため、文子（または弁次郎）の歌唱が入っている可能性がないとの断定はできない。

(7) 倉田喜弘によると、1904 年 9 月の天賞堂コロムビアの新聞広告には、弁次郎の名前の記載がないが、1905 年 8 月の新聞広告には弁次郎の名前の記載がある [倉田, 1979, 89]。

(8) 郡修彦は、天賞堂コロムビアの 1907 年 7 月発行の目録に載っている文子の「電車唱歌」が 1905 年の録音、1906 年 2 月の発売としている [郡, 1997] が、本稿は [岡田, 1988] による解説に従った。

(9) 広い意味で軍歌も唱歌の一部であると捉えることができる (注 15 参照) が、軍楽隊による軍歌の演奏盤は、今回の面数からは除いた。

(10) 倉田喜弘及び岡田則夫の監修により、大空社から復刻されている。 [倉田・岡田, 1996-1997]

(11) この時期の新聞及び雑誌上の日蓄の広告において、文子のレコードが度々宣伝されている。

(12) 「ラクダ印オリエントレコード両面盤目録」, 1916 年 7 月. なお, [八雲, 1915] には、同目録に記載の文子のレコードの歌詞が、2 面を除いてすべて収録されている。

(13) 大正時代前半期の日本では、まだレコードの著作権が法律によって保護されておらず、他社の正規盤を複製して売り出す複写盤（海賊盤）を発売する会社が横行していた。東洋蓄もそのうちの一社で、複写盤の専門レーベルであったウグイスレコードの目録「ウグイスレコード両面盤目録（大正五年七月改正）」（東洋蓄音器, 1916 年）によると、唱歌之部に掲載されている 12 枚 24 面のうち 7 枚 14 面が文子の複写盤である。文子のレコードは、東洋蓄以外の他社からも少なからず発売されていた。当然よく売れるレコードが複写盤の対象となっていたわけであるから、その標的とされた文子のレコードの人気ぶりが窺われる。

(14) N 氏への聞き取り及び [鮎川, 1995, 73] の記述を総合すると、文子は 1915 年の東京音楽学校選科修了後に結婚、アメリカに渡りピアノを研究するなどして数年間を過ごしたようである。

(15) 電気吹込の開始にはわずかに間に合わず、いずれも旧来の機械吹込である。

- (16) 「鉄道唱歌」は、東海道編を日蓄と東洋蓄とでそれぞれ吹き込んでいる。日蓄盤は、1面のみが発売であるため、全66番のうち11番までしか歌っていないが、東洋蓄盤に関しては、3枚組6面を発売し、66番まで全部歌い通している。
- (17) 日清戦争の前後に軍歌が流行し、軍歌集が多数出版された。①これら軍歌集は文部省検定済となって学校教育に積極的に採り入れられたこと、②最初軍歌集に収録された楽曲が唱歌集に再録されることが多かったこと、③軍歌の作詞・作曲者の多くが唱歌の作詞・作曲者でもあったことなどの点から、明治時代の軍歌は唱歌の一部であると考えてよい。明治時代の軍歌と唱歌の関連性に関しては、[長谷川・綿抜, 2009]が詳しい。
- (18) 同時期の他の唱歌レコードにも共通することであるが、伴奏に、明治時代の唱歌の普及に多大な貢献をしたオルガンではなくピアノが用いられたという点は、指摘しておく必要があるだろう。
- (19) 大正時代の唱歌レコードには、東京音楽学校卒業生歌唱によるものや、“〇〇小学校生徒“歌唱といった、学校主体のものも多かった。
- (20) 保田は明治末から1914-15年頃に、武谷は1917年頃に、文子のレコードをよく聞いていたようである。
- (21) 各定価は、[岡田, 1988]、[倉田, 1979]、『日蓄（コロムビア）三十年史』の記載を基にし、各職業の初任給は、[週刊朝日, 1987]によった。
- (22) 1912年創刊の雑誌『月刊楽譜』を分析した渡辺裕も、同誌上で蓄音機やレコードに関する記事や広告が急速に目立つようになるのは、大正10（=1921）年頃のことであると述べている [渡辺, 1997, 174]。
- (23) 『音楽と蓄音器』7巻10号（1920年10月号）には、過日自分の住んでいる地方で行われた蓄音機による音楽演奏の催しがいかに貴重な機会であったかという感想と、どうしたらこのような立派な蓄音機とレコードを入手することができるのかという質問が、信州の田舎に住んでいるという読者から寄せられている（161ページ）。都会でようやくレコード及び蓄音機が普及し始めた1920年においても、地方ではいまだに触れる機会が少なかったという事情が窺える。
- (24) 出張録音盤を販売していた天賞堂の新聞広告（例えば、1904年5月2日付読売新聞朝刊や1905年8月8日付東京朝日新聞朝刊）には、「軍隊用」「家庭用」などと並び「学校用」という見出しが並んでいる。また、時代は少し下るが、1912年2月14日付読売新聞朝刊には、「レコードの音色 蓄音機界の流行」と題したコラム上に、「最もその向々

で、学校などで用ゐられるのは言ふ迄もなく唱歌、楽隊等教育的のものが主だ」という記述が見られる。

(25) 教育現場では、蓄音機の音楽教育への利用が大正時代の半ば過ぎから始められた。[寺田, 2001a 及び 2001b] 並びに [木村, 1986, 10-11] が詳しい。

(26) 周東美材は、蓄音機の普及を目指す雑誌『蓄音器世界』（後に『音楽と蓄音器』と改題）が、1915年の創刊当初から蓄音機の家庭化を模索していたことを指摘しているが、同誌上では、学校での教育利用についての言説も、1917年頃から見受けられる。また、『音楽界』1915年1月号には早くも、平戸大が「音楽教育に於ける蓄音器の利用」という論説を載せている。

(27) [増井, 1980, 16] より。もともと1920年は、第一次世界大戦の好景気の影響により大正年間で一番の生産金額となっており、1934年によろやくこの金額が更新されている。

(28) [倉田・岡田, 1997] 第9巻より。1922年8月当時、唱歌として発売された56面の日蓄盤のうち31面がいまだに文子のレコードであった。なお、残り25面の中には、2(2)で言及した弁次郎の独唱盤1面も含まれている。

(29) いずれも日蓄盤。1面に数曲を吹き込んでいる場合、必ずしもその全曲が取り上げられているわけではない。

(30) 『コロムビア50年史』には、旧来の機械吹込から電気吹込に切り替えた1928年に、既に故人となった名人・名士のごく少数を除いて旧吹込原盤をすべて廃盤にしたとある。大正時代前半までに吹き込まれた文子の日蓄盤も、この時点で廃盤になったのであろう。

(31) 歌唱者・ピアノ伴奏者の双方で出演した日もあるため、合計回数と総出演回数とは一致しない。文子は、東京音楽学校選科で唱歌とともにピアノを履修していた他、1915年の修了後はピアノ演奏法の研究のためアメリカに滞在するなどしており、N氏によると、ピアノの腕前は相当のものであったとのことである。

(32) 文子は1917年、サンフランシスコで長女米子を出産している。米子は子ども時代、唱歌・童謡歌手としてレコード及びラジオで活躍していた。

(33) レコードの普及及びレコード産業の発達が発達が唱歌及び童謡に与えたこれらの影響については、[周東, 2006] 第5章が詳しい。

(34) 文子の長女米子も、ここに位置づけることができるであろう。

(35) 父弁次郎は、学習院予備科で皇太子時代の天正天皇に唱歌を教えていた。

(36) 例えば坪井秀人は、レコードに吹き込まれた本居姉妹及びそれ以降の童謡歌手の歌声を、「成長を止めて変化することのない、＜永遠少女＞の声」「大人社会に参入することのない無垢なる＜永遠少女＞」「彼ら（成人男性）が少年期に置き忘れてきた＜童心＞を受肉した存在」と表現している [坪井, 2006, 359, 361]。

(37) 鮎川哲也は文子の写真を見て、「深窓の令嬢とはこういう女性のことかと納得する」と述べている [鮎川, 1995, 73]。なお、令嬢として童謡を歌った本居姉妹の位置づけの論考として、[周東, 2008b] が詳しい。

(38) 周東美材によると、本居姉妹は、「多くの場合、写真つきで」「その動向や家庭生活」を紹介した「一連の新聞・雑誌記事などをつうじて、いわば聖なる偶像、アイドルとして受容され、消費されるようになっていった」 [周東, 2013, 116]。注3において、文子がしばしば雑誌のグラビアなどに載ったという記述を紹介したが、それがレコード歌手として全盛期の頃の話なのだとすれば、本居姉妹との共通性・連続性を見出すことができるかもしれない。

## 参考文献

- 鮎川哲也, 1995, 『唱歌のふるさと うみ』, 音楽之友社
- 岡田則夫, 1988, 「レコード関係資料」. 南博 (編者代表), 『近代庶民生活誌 第八巻』, 三一書房
- 長田暁二, 1994, 『童謡歌手からみた日本童謡史』, 大月書店.
- 木村信之, 1986, 『音楽教育の証言者たち (上) 戦前を中心に』, 音楽之友社.
- 倉田喜弘, 1979, 『日本レコード文化史』, 東京書籍.
- 倉田喜弘・岡田則夫 (監修), 1996-1997, 『大正期 SP 盤レコード 芸能・歌詞・ことば全記録』全 11 巻, 大空社.
- 郡修彦, 1997, 「収録曲解説」. 赤レンガの東京駅を愛する市民の会, 『懐かしき鉄道の歌』ライナーノーツ
- 小山章三, 2005, 「納所弁次郎」. 上笙一郎 (編), 『日本童謡事典』, 東京堂出版.
- コロムビア 50 年史編集委員会, 1961, 『コロムビア 50 年史』, 日本コロムビア.
- 週刊朝日編, 1987, 『値段の明治大正昭和風俗史 上』, 朝日新聞社.
- 周東美材, 2006, 「童謡歌手の歴史社会学—音響メディアの揺籃期における子ども向け文芸雑誌とレコード」, 東京大学大学院情報学環・学際情報学府 2005 年度修士論文.

- 周東美材, 2008a, 「鳴り響く家庭空間——1910-20年代日本における家庭音楽の言説と実践——」. 『年報社会学論集』, 第21号: 95-106.
- 周東美材, 2008b, 「「令嬢」は歌う——童謡にみる歌声とメディアの地層」. 『思想』, No. 1009: 63-86.
- 周東美材, 2013, 「童謡のメディア論—1920年代における「声の文化」の再編—」, 東京大学大学院情報学環・学際情報学府2013年度博士論文.
- 津田昌業, 1924, 『音楽鑑賞教育』, 十字屋楽器店.
- 武谷三男, 1985, 『思想を織る』, 朝日新聞社.
- 坪井秀人, 2006, 『感覚の近代』, 名古屋大学出版会.
- 寺田貴雄, 2001a, 「〈鑑賞〉意識の増大と鑑賞教育論の登場—日本における音楽鑑賞教育の軌跡2—」. 『音楽鑑賞教育』, 391号: 10-13
- 寺田貴雄, 2001b, 「唱歌科における鑑賞指導の試み—日本における音楽鑑賞教育の軌跡4—」. 『音楽鑑賞教育』, 394号: 16-19
- 日本近代音楽館編, 2003, 『明治の作曲家たち～音楽の花ひらく頃～』
- 長谷川由美子・綿拔豊昭, 2009, 「明治時代出版「軍歌集」にみる軍歌の変遷について」. 『図書館情報メディア研究』, 第7巻1号: 17-25.
- 初田亨, 1993, 『カフェーと喫茶店』, INAX.
- 細川周平・片山杜秀, 2008, 「納所 弁次郎」. 細川周平・片山杜秀(監修), 『日本の作曲家—近現代音楽人名事典』, 日外アソシエーツ.
- モラスキー, マイク, 2010, 『ジャズ喫茶論——戦後の日本文化を歩く』, 筑摩書房.
- 増井敬二, 1980, 『データ・音楽・にっぽん』, 民音音楽資料館.
- 森垣二郎, 1960, 『レコードと五十年』, 河出書房新社.
- 八雲山人(編), 1915, 『蓄音器文句集』, 三芳屋書店.
- 保田太郎, 1970, 『岡山音楽夜話』, 日本文教出版.
- 山口亀之助, 1936, 『レコード文化発達史 第一巻』, 録音文献協会.
- 山本壽, 1924, 『音楽の鑑賞教育』, 目黒書店.
- 渡辺裕, 1997, 『音楽機械劇場』, 新書館.
- 『日蓄(コロムビア)三十年史』, 1940, 日本蓄音器商会.